

機関番号：84602

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2007～2010

課題番号：19202025

研究課題名(和文) 東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究

研究課題名(英文) Archaeological studies on Royal Palaces and Tumuli of the Early State in East Asia

研究代表者

寺澤 薫 (TERASAWA KAORU)

奈良県立橿原考古学研究所・総務企画部・部長

研究者番号：90250365

研究成果の概要(和文)：本研究項目は多岐にわたるが、その最大の成果は、桜井茶臼山古墳の発掘調査によって、初期大型前方後円墳後円部墳頂の施設(方形壇・丸太垣等)および堅穴式石室の構造を明らかにするとともに、出土した大量の銅鏡片によって当該期の大型前方後円墳の銅鏡多量副葬の実態を、初めて確認できたことにある。これらの成果は、過去の調査成果を是正するとともに、新知見の遺構検出・副葬品の確認等により今後の当該研究に多大なる影響を及ぼすことになる。

研究成果の概要(英文)：Archaeological studies on Ryal Palaces and Tumuli of the Early State in East Asia

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	9,900,000	2,970,000	12,870,000
2008年度	9,600,000	2,880,000	12,480,000
2009年度	10,400,000	3,120,000	13,520,000
2010年度	6,100,000	1,830,000	7,930,000
年度			
総計	36,000,000	10,800,000	46,800,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学・初期都宮・纏向遺跡・王墓・纏向諸古墳等・勝山古墳・桜井茶臼山古墳

## 1. 研究開始当初の背景

## (1) 奈良盆地東南部遺跡群

日本古代国家形成期を考古学的に検討する場合、奈良盆地東南部における弥生時代末から古墳時代前期にかけての遺跡群の動向に関する評価を避けて通ることはできない。なかでも、奈良県桜井市纏向遺跡は、隔絶的ともいべき集落規模の大きさや、祭祀・生産関係遺構の集中、出土遺物にみる広域移入品の高率な存在等から、当該期において他に類を見ない遺跡といえる。さらに、遺跡内に分布する100m前後級の前方後円墳である纏向諸古墳が、当該期において突出した規模・内容を有し、初期王墓として位置づけられる

蓋然性が高いことから、日本における初期都宮遺跡(纏向遺跡)と、それとセットをなす王墓(纏向諸古墳等)の存在をこの地域に求めることができる。

## (2) 研究動向

研究代表者寺澤は、従前よりこうした観点に立ち、纏向遺跡群の評価を積極的に行い、その考古学的検討を通じて、日本における古代国家形成過程の解明を目的とする研究を実施してきた。また、同時に研究代表者および研究分担者等は、平成5年度以来、纏向諸古墳を含む奈良盆地東南部の初期古墳に関して、学術的発掘を含む総合的な調査・研究

を実施している。

個別の課題としては、研究分担者豊岡が、古式土師器の標準的編年である纏向編年の再検討を行い、同岡林が纏向諸古墳の内部構造の検討を行う等、纏向遺跡群をめぐる調査・研究成果を蓄積しつつあった。

### (3)本研究の必要性

上記の諸作業を通じて、研究代表者および研究分担者等は、纏向遺跡群が日本における初期都宮および王墓群として、日本の古代国家形成過程の考古学的研究において重要な位置を占めるものであるとの認識を深めるとともに、一層の研究の深化を期するため研究課題となるいくつかの計画的かつ組織的な検討を行う必要性を認識した。

纏向遺跡に対する調査研究は、すでに30年にわたり、膨大な資料の蓄積があるが、残念ながらそれら諸資料の体系化および総合化は、本研究着手以前には、十分とはいえないものであった。これらの既存資料を再精査し、近年飛躍的に精度を増しつつある科学的分析・デジタル記録手法も駆使しながら、より多様な情報を収集するとともに、その全体を総合的に俯瞰しうるような体系化を図る必要があった。また、依然として未確認の状況にある宮殿地区の特定や、纏向諸古墳に先行する墳墓の確認等、纏向遺跡群の全体像を理解する上で不可欠な資料を得るため、地形測量や部分的な発掘調査を明確な目的意識のもとに計画的に実施し、新たな資料の蓄積を進めることが求められていた。こうした基礎的作業の蓄積を前提として、それらの成果を活用し、纏向遺跡群を東アジア世界における日本の初期都宮・初期王墓群として位置づけ、比較考古学的な観点からその内容を多角的に検討することが可能になると考えられた。

## 2. 研究の目的

### (1) 纏向遺跡に関する歴史的な評価の構築

ヤマト王権の初期都宮あるいは中国史書にいう卑弥呼政権の王都とも目されている纏向遺跡に関する基礎データを集積し、纏向遺跡に関する歴史的な評価に対する確固とした基盤を構築する。

### (2) 奈良盆地東南部地域の遺跡群の再評価

発掘調査等によって王墓としての初期古墳の造営実態を把握し、奈良盆地東南部地域の遺跡群の再評価を行う。

### (3) 奈良盆地東南部遺跡群の特質の明確化

①上記(1)(2)で得られた資料を基盤として、日本における初期都宮および王墓群所在地としての纏向遺跡群の空間的構造、成立と変遷、特殊性等を総合的に明らかにする。

②中国・朝鮮半島等、東アジア世界における初期都宮・初期王墓との比較考古学的な検討を通じて奈良盆地東南部地域の遺跡群の特質を明確化する。

## 3. 研究の方法

### (1) 纏向遺跡等に関する資料の蓄積

①纏向遺跡および周辺の遺跡データベース完備。

・奈良県桜井市所在の纏向遺跡群の既存資料を精査し、多角的な方法で資料の体系化、新知見の抽出を行う。

②纏向周辺の環境復元（自然地形および植生環境等）。

・纏向遺跡群出土植物遺体の樹種同定・木器の材質分析・年輪年代測定等の実施。

### (2) 発掘調査等

①纏向巻野内地区（珠城山古墳群北方地区）の地形測量調査。

②勝山古墳の墳形および規模を確定するための発掘調査。

③桜井茶白山古墳の後円部墳頂方形壇の構造解明・堅穴式石室の構造確認・木棺取り上げおよび保存処理のための発掘調査。

(3) 東アジアにおける纏向遺跡および初期都宮の比較考古学的研究

①文献の検討と現地踏査を通して、中国の初期都宮遺跡等々との比較研究

②文献の検討と現地踏査を通して、朝鮮半島の初期都宮遺跡との比較研究

## 4. 研究成果

### (1) 資料調査

・研究協力者である橋本輝彦氏（桜井市教育委員会）を中心として、主に桜井市教育委員会が過去に調査した纏向遺跡出土資料の再精査を実施し、調査回数毎の内容がより明確に把握することができるようになった。

### (2) 発掘調査等

①纏向巻之内地区（珠城山古墳群北方地区）の地形測量調査。

・平成19年度に纏向巻野内地区（珠城山古墳群北方地区）の航空写真測量を業者委託し、平成21年度に南北350m×東西500mの範囲の地形測量図（S=1/500）図化作業を完了した。また、当該範囲に該当する過去の調査区を地形図上にプロットし、(1)の成果と対照することによって、各調査区の立地および位置関係、調査区間の遺構相互の関連性の有無、出土遺物の内容の検討等が容易になった。

②勝山古墳の発掘調査

・平成19・20年度に勝山古墳の墳丘規模・墳形・築造時期を確認することを目的とした第5・6次調査を実施し、以下の通りの結果を得

た。

・墳形：くびれ部が細く前方部先端が撥形に広がる前方後円墳。

・墳丘主軸：N-76° 12′ -E。

・墳丘規模：全長 115m、後円部径 70m(南北)・67m(東西)、くびれ部幅 26m、前方部長 49m、同前端幅 44m。

・周濠形態：非対称の馬蹄形。

・築造時期：纏向 3 類後葉(3 世紀第 2 四半期)。

### ③ 桜井茶白山古墳の発掘調査

・平成 20 年度に桜井茶白山古墳後円部墳頂に構築された方形壇遺構の構造を再確認することを主たる目的とした第 7 次調査、平成 21 年度に同古墳の石室構造の再確認および 60 年前の調査で埋め戻された木棺を搬出するための第 8 次調査を実施した。調査成果は、以下の通りである。

・方形壇の構造：方形壇は、岩盤を削り出して高さ約 75 cm 程度に成形し、上部に若干の盛り土を加えた低平なもので、上面を小礫・板石で化粧し、縁近くに多数の二重口縁壺を並べたものであったと復元される。

・丸太垣の構造：方形壇の裾を巡って、布掘り状の掘方内に丸太を互いに密に接するように立て並べた構造で、今回の調査で新たに検出された新知見の遺構である。柱芯での全体規模は南北約 12.7m、東西約 10.4m に復元される。布掘りは、検出面で上端幅約 1.3m、下端幅約 0.5m、検出面からの深さは約 1.1~1.5m を測るため、地表面上の柱の高さは 2m 以上であったと推定される。丸太垣は、埋葬部とその上部の方形壇を外部から遮蔽する恒久的な施設として設置されたものと考えられる。

・堅穴式石室の規模：堅穴式石室は、南北長 6.75m、東西幅は南壁で 1.05m、北壁で 1.27m、高さは最大で 1.71m を測る。

・堅穴式石室の構築法：(第 1 工程)墓壙底に風化した岩盤の削り出しによって基台を作出し、基台の上面と周囲に、全面に水銀朱を塗布した板石を敷いた後、基台上面の外周を囲うように板石を配置する。(第 2 工程)基台上面の板石敷き上に棺庄土を置き、棺を安置するのと前後して、壁体下位の石材を積む。(第 3 工程)壁体中位の石材を積む。(第 4 工程)壁体上位の石材を積む。(第 5 工程)壁体・控え積み石材上に敷き土をしながら 12 個の天井石を懸架し、その後粘土で天井石を被覆する。

・木棺：1949 年の第 1 次調査で検出された木棺が、ほぼ当時のままの状態に堅穴式石室内に埋め戻されている状態を再確認した。棺身底部長約 4.89m、幅約 0.75m、最大厚約 0.27m、重量約 264 kg。棺室相当と考えられる部分は、長さ約 2.8m が遺存し、中央の棺室部分のみを削り抜く構造の割竹形木棺と考え

られる。また、木棺は全面に赤色顔料が塗布されていたものと考えられる。木棺の用材は、1961 年報告の「トガ」ではなく、コウヤマキであることが判明した。2009 年 10 月 4 日に木棺を石室から取り出し、橿原考古学研究所保存処理施設に搬入した後、三次元計測と平面の写真撮影、年輪年代計測のためのサンプリング、腐朽状態の検討のためのサンプリングを行い、現在保存処理中である。

・出土遺物：方形壇裾で確認した二重口縁壺以外は、墓壙・石室内の盗掘土およびそれを掘削した第 1 次調査埋め戻し土等から出土した。出土遺物の内訳は、銅鏡片 331 点、玉杖片 64 点、弣形石製品 1 点、石製垂飾品 1 点、石製腕飾類片 3 点、不明石製品片 28 点、碧玉製管玉 7 点、翡翠製棗玉 1 点、ガラス製管玉 1 点、ガラス小玉 4 点、ガラス破片 2 点、板状鉄斧 2 点、鉄鏃 2 点、不明鉄製品 51 点、合計 496 点である。331 点の銅鏡片は、鏡背文様等を基準として分類した結果、最低 81 面の鏡が存在することが判明した。その内訳は、内行花文鏡 9 面、倣製内行花文鏡 10 面、単夔鏡 1 面、方格規矩鏡 2 面、細線獣帯鏡 3 面、三角縁神獸鏡 26 面、盤龍鏡 1 面、環状乳神獸鏡 4 面、鼉龍鏡 4 面、神獸鏡類 16 面であり、この中には、群馬県蟹沢古墳出土鏡(東京国立博物館所蔵)の三角縁正始元年陳是作同向式神獸鏡と同一の字体が鑄出された鏡片が含まれていることが、三次元計測によって同定された。また、81 面という面数は、一墳墓出土鏡面数として最多であった福岡県平原 1 号墓の 40 面を遙かに凌ぐ面数であり、大型前方後円墳の銅鏡多量副葬の実態を、初めて垣間見ることができた。銅鏡以外に注目される遺物としてガラス製管玉がある。石室内の木棺東南部埋め戻し土から出土したガラス製管玉は、長さ 81.6mm、径 7.09~7.7mm、孔径 1.93~2.18mm、重量 12.15g。鉛バリウムガラスで、発色は銅による。気泡をほぼ含まない、精緻な鑄上がりガラス、弥生時代~古墳時代のガラス製管玉としては、国内最長寸である。素材となった棒状ガラスは、舶載品の可能性がある。

### (3) 東アジアにおける纏向遺跡および初期都宮の比較考古学的研究

#### ① 先秦時代および西周時代の遺跡を中心とした踏査

・平成 19 年度に、中華人民共和国甘粛省・陝西省所在の先秦時代および西周時代の遺跡を中心とした踏査を実施した。具体的には、甘粛省張家川回族自治州博物館・礼泉西山遺跡・同県大堡子山遺跡、陝西省鳳翔県博物館・宝鶏青銅器博物館・雍城工作站・秦公 1 号大墓・周公廟・周原工作站・漢陽陵博物館・兵馬俑博物館・秦始皇陵鎧甲坑・櫟陽城址・陝西省考古研究院・陝西省歴史博物館・西安

博物院・西安理工大学西漢壁画墓発掘現場等を踏査した。

②河南省所在の夏商周代の遺跡踏査

・平成20年度は、主に中華人民共和国河南省所在の夏商周代の遺跡踏査を実施した。具体的には、河南省洛陽市隋唐洛陽城明堂遺址発掘調査現場・同天堂遺址・同洛陽城応天門遺址・同周王城天子駕六博物館・同洛陽博物館・同洛陽古代芸術博物館（洛陽古墓博物館）・同長陵（北魏孝文帝陵）・同閔林・同漢魏洛陽城址・同北魏洛陽城閭闔門遺址、河南省偃師市偃師二里頭遺址（同工作站）・同偃師商城遺址（同工作站）・同偃師商城博物館、河南省鄭州市鄭州商城遺址・同鄭州市博物館、河南省安陽市殷墟博物館・同殷墟王陵区・同殷墟工作站・同洹北商城宮殿区2号基址発掘調査現場、河北省邯鄲市趙国王城遺址・同趙国王陵・同邯鄲市博物館・同鄴城三台遺址等を踏査した。

③中岳嵩山周辺および曹魏武王高陵・鄴都等の踏査

・平成21年度は、初期大和王権が崇拝した三輪山信仰と夏代から歴史時代に到るまで中国の各王朝が崇拝した河南省中岳嵩山信仰との比較検討、および昨年公表された曹魏武王高陵と鄴都との関係について実地踏査を行った。具体的には、中華人民共和国河南省洛陽市隋唐洛陽城天堂遺址発掘調査現場・同洛陽城定鼎門遺址、同省登封市漢三闕（太室闕・啓母闕・少室闕）・中岳廟漢石人、同省新鄭市鄭韓故城・鄭王陵博物館・胡莊韓王陵M1・2号墓、同省鄭州市河南博物院、同省安陽市安陽県曹魏武王高陵、河北省邯鄲市臨漳県鄴城三台遺址・同市磁県北朝陵墓群（東魏孝静帝善見西陵・北齐神武帝高歡義平陵・北齐文襄帝高澄成陵）等の踏査・見学を実施した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計15件）

①岡林孝作、「出現期の竪穴式石室」、『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館2007年度共同研究成果報告書』、無、2009年、pp.175-189

②寺沢 薫、「「倭国乱」と「卑弥呼共立」—その実年代と東アジア史の実像—」、『王権と武器と信仰』、無、2008年、pp.2-15

③寺沢 薫、「農業共同体論と日本古代史研究」、『古代学研究』、有、第180号、2008

年、pp.433-446

④坂 靖、「奈良盆地の古墳時代集落と居館—前期～中期における政治的動向—」、『考古学研究』、有、第55巻第2号、2008年、pp.29-44

⑤岡林孝作、「竪穴式石室の成立過程」、『橿原考古学研究所論集』、無、2008年、第十五、pp.143-171

⑥豊岡卓之、「奈良盆地の前期前方後円墳の墳形類型と山城盆地への波及」、『考古学に学ぶ(Ⅲ) 同志社大学考古学シリーズ』、無、IX、2007年、pp.285-296

〔学会発表〕（計5件）

①寺沢 薫・豊岡卓之・橋本裕行・岡林孝作・東影 悠、「关于日本奈良县櫻井市櫻井茶臼山古墳調査成果」、汉代城市和聚落考古与汉文化国际学术研讨会、2010.9.19、中华人民共和国河南省内黄县枣乡度假村第八场

②寺沢 薫・豊岡卓之・橋本裕行・岡林孝作・奥山誠義・東影 悠・酒井将史、「奈良県櫻井茶臼山古墳の再調査」、日本考古学協会第76回総会、2010.5.23、国土館大学

③岡林孝作、「櫻井茶臼山古墳の調査概要」、考古学研究会(岡山2月例会)、2010.2.13、岡山大学津島キャンパス

④林部 均、「飛鳥の王宮—日本古代における王宮・王都の形成—」、国際シンポジウム「東アジアから見る古代学の今と未来」、2008.10.4、明治大学

⑤岡林孝作、「竪穴式石室の構造的変遷と系譜」、(財)大阪府埋蔵文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会、2008.1.11、大阪府立近つ飛鳥博物館

〔図書〕（計2件）

①寺沢 薫（監修）、岡村印刷工業、「東アジアにおける初期都宮および王墓の考古学的研究」、2011、136

②寺沢 薫、吉川弘文館、「青銅器のマツリと政治社会」、2010、508

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺沢 薫 (TERASAWA KAORU)

奈良県立橿原考古学研究所・総務企画部・部長

研究者番号：90250365

(2) 研究分担者

豊岡 卓之 (TOYOOKA TAKUSHI)

奈良県立橿原考古学研究所・研究員  
研究者番号：00250374  
橋本 裕行 (HASHIMOTO HIROYUKI)  
奈良県立橿原考古学研究所・埋蔵文化財  
部・総括研究員  
研究者番号：80270776  
林部 均 (HAYASHIBE HITOSHI)  
大学共同利用機関法人・人間文化研究機  
構・国立歴史民俗博物館・研究部・考古研  
究系・准教授  
国立大学法人・総合研究大学院大学・文化  
科学研究科・准教授 (併任)  
研究者番号：70250371  
坂 靖 (BAN YASUSHI)  
奈良県立橿原考古学研究所・総務企画部・  
総括研究員  
研究者番号：30250377  
岡林 孝作 (OKABAYASHI KOSAKU)  
奈良県立橿原考古学研究所・附属博物館・  
総括学芸員  
研究者番号：80250380  
清水 昭博 (SHIMIZU AKIHIRO)  
帝塚山大学・人文学部日本文化学科・准教  
授  
研究者番号：20250384

(3)研究協力者

米川 裕治 (YONEKAWA YUJI)  
奈良県立橿原考古学研究所・埋蔵文化財  
部・主任研究員  
研究者番号：60332459  
奥山 誠義 (OKUYAMA MASAYOSHI)  
奈良県立橿原考古学研究所・総務企画部・  
主任研究員  
研究者番号：90421916  
東影 悠 (HIGASHIKAGE YU)  
奈良県立橿原考古学研究所・総務企画部・  
主任技師  
研究者番号：60470283